

た保井畠弓さんに中心となつていただき、途中からは版画専門の美術館で学芸活動をリードされた佐川美智子さんも加わって、企画を練つていきました。

『言語文化』第三十三号の特集として、昨年十二月五日に明治学院大学で開催されたシンポジウム「創造・伝達・記憶の場としての版画」の報告をお届けします。

イタリア、ネーデルラント、フランスという西洋美術の「三大中心地」の周縁に追いやられがちなドイツ語圏から見た美術史の地平に光を当て、また、通史的な視点を入れて近世以前と近代以降の研究者の対話を促すことを目的に、文学部芸術学科美術史学系（西洋美術史）と

（大原まゆみ）

\*

『言語文化』第三十三号をお届けする。今年の特集「創造・伝達・記憶の場としての版画」については、大原氏の緒言を参照されたい。

ドイツ語圏美術史研究連絡網がシンポジウムを企画・施行し、その記録を『言語文化』誌上で公開するという活動も、今回で三回目を迎えました。今回は、ドイツ語圏の美術では特に創造し発信する場として重要な機能を果たしてきた版画を取り上げ、長年版画史研究に携わってきた

特集以外の寄稿のうち、「中国独立映

画のプラットホーム——俳優ワン・ホンウェイ（王宏偉）の多様な貌」は、六月二〇日に開催された明治学院大学文学部芸術学科・言語文化研究所共催の講演会「中国独立映画のプラットホーム・俳優ワン・ホンウェイ（王宏偉）の多様な貌」で開催されたパネル・ディスカッショングの記録である。本シンポジウムは、中国自身が社会主義市場経済体制に移行し、急速なデジタル化が進み映像制作も大きく変わった状況の中で、誕生二十五周年を迎えた中国独立映画にスポットライトを当てたもので、中国文化研究者の秋山珠子氏、ドキュメンタリー研究家のマーク・ノーネス氏、本学芸術学科の齊藤綾子が中心となつて企画した。『プラットホーム』（二〇〇〇年）を始め、北京電影学院で同級生だった賈樟柯監督作品に欠かせない俳優として知られる王宏偉（Wang Hongwei）氏をゲストに迎え、秋山珠子氏（字幕翻訳家、中国文化研究者、立教大学教育講師）、マーク・ノーネス氏（ドキュメンタリー映画研究

者、ミシガン大学教授)、中嶋聖雄氏(早稲田大学アジア太平洋研究科准教授) 中山大樹氏(中国インディペンデント映画祭代表)が参加した。王氏のプロフィールは以下の通り。一九六九年河南省生まれ。一度社会人を経験した後に北京電影学院文学科映画理論コースに入学、そこで同級生だった賈樟柯らと「青年実驗電影小組」を作り『小山の帰郷』(一九九五年)や『一瞬の夢』(一九九七年)を制作。賈樟柯監督の『プラットホーム』でも主役の一人を演じた。これがきっかけで他の監督の作品でも俳優として仕事をするようになり、戴思杰監督『小さな中国のお針子』(二〇〇二年)、王朔監督『スリッケース』(二〇〇七年)、王兵監督『暴虐工廠』(二〇〇七年)、賈樟柯の『罪の手ざわり』(二〇一三年)などにも出演。また、北京独立電影展ではプログラムディレクター、栗憲庭電影学校では教壇にも立ち、二〇一一年からは栗憲庭電影基金のアートディレクターとしても活動している。

当日のプログラムは、齊藤の開会挨拶に続き、秋山氏の「アントロダクション」「カルチュラル・アサイラムとしての中国独立映画」、ノーネス氏の「クリップ上映とトーク・セッション『王宏偉の多様な貌』」、そして、参加者全員が集まつたパネル・ディスカッションが行われた。王氏は中国独立映画の設計図を築いてきた。中心人物であるが、俳優・プロデューサー・教育者とさまざまな貌を持つ王氏の起伏に富むキャリアを振り返りながら、気鋭の中国映画の専門家たちが同時代の監督の作品でも俳優として仕事をするようになり、戴思杰監督『小さな中国のお針子』(二〇〇二年)、王朔監督『スリッケース』(二〇〇七年)、王兵監督『暴虐工廠』(二〇〇七年)、賈樟柯の『罪の手ざわり』(二〇一三年)などにも出演。また、北京独立電影展ではプログラムディレクター、栗憲庭電影学校では教壇にも立ち、二〇一一年からは栗憲庭電影基金のアートディレクターとしても活動している。

における無形文化』は、研究所主催で二〇一五年二月二三日に開催された講演会の発表原稿である。「無形文化遺産」という概念の背後にある政治的・文化的・社会的文脈を確認しながら、日本の芸術史における文化政策としての重要性を指摘し、同時に、こうした政策は実は芸術の受容とは切り離せない問題であり、メンツエル氏は無形文化の「美意識そして鑑賞能力」を養うべく教育制度との連携を示唆する極めて興味深い内容である。

また、本学芸術学科の映像系列の専任教員が中心となって、前年度から始まった日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクトの第二回は、映画監督の篠田正浩氏のインタビューである。大島渚、吉田喜重監督と並んで「松竹ヌーヴェルヴィューム」とドキュメンタリー、北京と地方都市など錯綜した文脈の越境に位置するチュアとプロフェッショナル、フィクションとドキュメンタリー、北京と地方都市など錯綜した文脈の越境に位置する中国独立映画の困難かつ力動的な現状が浮かび上がってくるだろう。

シユテファン・メンツエル氏の「護らなければ消えてしまう? — 物質社会

松竹という日本を代表する撮影所でどのように映画制作に関わっていらしたかが、ヴィヴィッドに伝わる内容となつた。監督はさまざまな機会で松竹時代についてもお話をされてきたが、今回のようにまとまつた形になつたのは数少ないと思われ、大変貴重な歴史資料となるだろう。

インタビューの依頼に快諾され、長時間のインタビューに答えてくださつた篠田監督と表現社のスタッフに感謝したい。また、「ホメーロス輪読会」の講師である生田康夫氏がホメーロス関係の論考を寄稿された。

二〇一五年度の本研究所のその他の活動について簡単に報告しておきたい。

五月一五日には、研究所主催講演会として、「(SCOTLANDS) NEU! REEKIE! —TAKE TO TOKYO—」と題され、スコットランドから来たアートグループの詩、アニメーション、音楽を組み合わせたパフォーマンスが開催された。日本のポップユニット、テニスコートと詩人で

もある本学英文学科ポール・ハラ准教授が参加した。

五月三一日には、言語文化研究所・日本フランス語フランス文学会共催講演会としてスイス・ヌーシャテル大学のダニエル・サンシュ氏が、キュスター・フローベールの『感情教育』において、写実主義の作家として知られるフローベールが使つた «Ce fut comme une apparition» (〔それは一つの幻のようであつた〕) という謎めいた表現を手がかりに、幻(幽霊)、超自然、聖母マリアとの関連に注目しながら、さらに一九世纪フランス文学のエクリチュール全体へと考察を広げる『Les apparitions dans la littérature française』と題される講演を行つた。

六月五日には、明治学院大学文学部芸術学科・言語文化研究所共催講演会として「ドキュメンタリー映画作家アン・兼子上映とトーク」が開催された。米国ロサンゼルス拠点に活躍いるインディのドキュメンタリー映画作家

であるアン兼子氏を講師に迎え、アーチストになる夢と国家への義務との間に挟まれた日系二世の若者スタンリー・ハヤミの日記をもとに、一六歳の青年が第二次世界大戦に巻き込まれていく過程を彼の視点から描いたドキュメンタリー『A Flicker in Eternity』(シャロン・ヤマトとの共同監督)を上映、トークが行われた。

続いて、一二月一七日には、研究所主催の講演会「心理学から見た性のダイバーシティ・LGBT・セクシアルマイノリティ」が、英文学科准教授の貞廣真紀氏の企画で、石丸径一郎氏(東京大学)にLGBTに関する国内外の情勢と心理学から見たセクシユアリティについてお話しいただいた。

一二月二三日には、アートホールで「明治学院ケルティック・クリスマス 2015」として、松江からハーンの曾孫で研究者の小泉凡氏による「ラフカディオ・ハーンとケルト口承文化の世界」の講演とケルト音楽コンサート「アイリッシュ・ハープ、ギター・デュオ」寺本圭

佑氏と山口亮志氏の演奏によるレクチャード・コンサートが本年も開催された。

最後に二〇一六年三月五日に研究所主催で、「リリー・マルレーン」上映公開セミナー・ファスピンドラー、ファシズム、エンダー」が開催された。ドイツ文化センターのご協力により、ライナー・ヴァルナ・ファスピンドラーが唯一ナチ時代を直接扱った『リリー・マルレーン』（一九八一）のDVD上映を行い、続いてドイツ映画研究者で東京国際大学准教授・本学非常勤講師の渋谷哲也氏が「自壊するファシズム美学——ファスピンドラーが『リリー・マルレーン』に込めたもの」、本学芸術学科教授の斎藤綾子が「ファスピンドラーのリリー 浮遊する声と増殖する身体」と題される発表をそれを行い、続いて、フェリス女学院大学

教授で、ハンナ・アーレント研究翻訳者の矢野久美子氏がディスカッションとして加わり、ディスカッションが行われた。今まで失敗作と見なされ議論される機会の少なかつた『リリー・マルレーン』をめぐつて、ファスピンドラーが脱構築する「ナチ娯楽映画」の政治性をファシズム、エンダー、映画技法という角度から考察し、活発な議論が交わされた。

また、研究所では上述した「ホメーロス輪読会」の他にも、「読む短歌・詠む短歌」連作の挑戦（講師・石井辰彦氏）、「古典ギリシア語」の初步文法、中級・上級講読講座（講師・金子佳司氏）が続けられたが、今年度は「Syntax Reading Group」（講師・船越健志氏）が新しく加わった。

以上、二〇一五年度も多彩な内容の紀要をお届けすることができ、また所員、委員の皆さま他多くの方のご協力、ご尽力があり、例年通りにバラエティ溢れる活動を行うことができた。お礼を申し上げたい。来年は新所長としてフランス文学科ジャック・レビイ氏が就任予定である。さらに一層魅力的なイベントや講演会などが期待され、引き続き研究所の活動に関心を持つて見守って頂ければ幸いである。最後になつたが、不慣れな所長として二年の活動を無事続けることができたのは、なんと言つても研究所事務担当の深沢比呂子さんのお陰である。ぎりぎりのスケジュールの中で、いつも笑顔で対応してくれた深沢さん、ありがとうございました。

（斎藤綾子）